

「父よ、時が来ました」

(ヨハネ17:1～5)

挽地茂男

2020.5.3 日本基督教団千歳丘教会礼拝



山高神代桜(やまたかじんたいざくら)(山梨県北杜市)日本三大桜

少し季節外れな話ですが、桜というと皆さんは何を連想されますか。季節はもちろん春です。春爛漫これから、野山の草木に緑が増し加わり、花が咲き乱れる。しかし桜については、桜にこと寄せて卒業などの「わかれ」を詠う歌や、詩や、俳句が多いのです。当然、辞世の句なども多くみられます。小林一茶の俳句にこのような句がございます。「いざゝらば死ゲイコせん花の陰」文化5年(1808年)一茶46歳の時の句であります(文化句帖に所収)。当時は40歳で初老といわれた時代ですから、

人生の終わりを実感しながら詠んだ句だと思います。この句は西行の「願はくは／花の下にて／春死なむ／その如月の／もちづきのころ」という歌を踏まえた句です。一茶の句は西行の歌に比べると軽い感じがしますが、死のことが頭の片隅にあることは確かです。その二年後にも一茶は、桜にこと寄せて同じような句を詠んでいます。文化7年(1810年)一茶48歳の一句です。「死支度／致せいたせと／桜哉」(七番日記に所収)。桜の散り際に、自分の人生の散り際に、人生の終わりを重ねて詠んだ句です。死のことを常に念頭におきながら、一茶には「死支度」が出来ていたわけではなかったようです。それでも死は彼の念頭から離れず、後年一茶には「けふは花／見まじ未来が／恐ろしき」とい



三春滝桜(みはるたきざくら)(福島県三春町)日本三大桜



根尾谷淡墨桜(ねおだにうすずみざくら)(岐阜県本巣市)日本三大桜

う迫真の句があります。文政元年(1819年)一茶56歳の句です(七番日記に所収)。50歳で結婚した一茶が四人の子どもをもうけながら、つぎつぎに夭折していく時期です。61歳で妻子の全員を失います。桜の花を避けています。見ると未来がおそろしい、というのです。一茶の死は9年後の文政10年11月19日(1828年1月5日)一茶65歳の年ですが、その10年ほど前頃から自分の死への予感、死への恐怖は強く念頭から去らなかったのでしょう。一茶の辞世の句はこうです。「**たらいから／たらいにうつる／ちんぷんかん**」産湯のたらいを使う誕生から死んで湯灌のたらいを使うまでの一生は、結局、あっという間でちんぷんかんぷんだった、ということです。

本日のヨハネによる福音書17章は「**大祭司の祈り**」と呼ばれていて、イエス・キリストの辞世の句とも言える祈りを記しています。このヨハネ17章は、主イエスが逮捕され、裁判を受け、十字架に上げられる直前の主イエスの祈りを記しています。主イエスがご自分の生涯の「**終わり**」を強く意識して祈った祈りであります。ですから、この世からの別れに際して最も重要なことが祈られます。先取りしますと、最も重要なこととは2節の「**永遠の命**」です。主を信じる者、わたしたちの「**永遠の命**」です。そして3節が永遠の命を説明します。「**永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです**」。

この祈りを含むヨハネ福音書の13-17章は、マタイとマルコとルカ福音書〔共観福音書〕の「最期の晩餐」と「ゲツセマネの祈り」にあたる部分で、ヨハネは



デューラー「ヨハネとペトロ」

この部分を、ヨハネ流の感情豊かな瑞々しい筆づかいで丹念に構成しています。その 13 章から 17 章の構成を確認しておきましょう。三部構成です。第一部は①最後の晩餐で、13 章と 14 章〔つまり 13:1-14:31〕です。ヨハネはここに、他の福音書にはない主イエスが弟子たちの足を洗う「洗足の出来事」(13:1-30)と第一回目の「別れの説教」(13:31-14:31)を記しています。第二部は② 15 章と 16 章〔つまり 15:1-16:33〕で、主イエスの第二回目の「別れの説教」(15:1-16:33)です。そして第三部が③ 17 章全体の「別れの祈り」(17:1-26)の部分で、ふつう「大祭司の祈り」と呼ばれています。ヨハネ以外の福音書つまりマタイ、マルコ、ルカの福音書〔共観福音書〕では「ゲツセマ



ゲツセマネの園

ネ」の祈りに当たるのがこの「大祭司の祈り」の部分です。

さてこの 17 章つまり「大祭司の祈り」は三つの祈りに分けることができます。一つめは① 1 - 5 節で、主イエスが自分のために祈る祈りです。二つ目は② 6 - 19 節で、主イエスの弟子たちのための祈りで、自分が世を去った後、弟子たちが守られるようという祈りです。そして三つ目が③ 20 - 26 節で、弟子たちが福音を伝えることによって、新たに信者となる人々のために祈る主イエスの祈りです。つまり主イエスから弟子たちに受け継がれた宣教活動の結果として救われる人々すべてのための祈りなのです。その意味では、わたしたちのための祈りでもあります。主イエスはわたしたちのためにも祈られたのです。イエス・キリストの弟子たちの宣教が信じる者たちを生み出し、その信じる者たちが、また、信者たちを生み出していくその連鎖は、2000 年以上も続いてきたのです。それによって、今日のキリスト者たち、極東のわたしたちの所にまで、主イエス・キリストの福音が届いたのです。この祈りには、わたした

ちもその視野の中に入っていた、
といってもよいのです。今日は一
つ目の１－５節の、主イエスがご
自分のために祈る祈りです。

この祈りで、まず注目しなければ
ならないのは、①「**祈る人イエ
ス**」「**祈るイエス**」(v. 20) です。

実はこの１７章
すなわちこの
「大祭司の祈り」
のすぐ後の１８
章(１節)から主
イエスの受難物
語が始まりま



す。死に向かっていく主イエスの
物語が具体的に展開し始めます。
この「大祭司の祈り」は置かれた
位置から言っても、繰り返します
が、ヨハネ版「ゲツセマネの祈り」
なのです。ほかの福音書の「ゲツ
セマネの祈り」も参考に見ておき
ましょう。マルコ福音書です。「**1
4:33** そして、ペトロ、ヤコブ、
ヨハネを伴われたが、イエスはひ
どく恐れてもだえ始め、**14:34** 彼
らに言われた。『わたしは死ぬば
かりに悲しい。ここを離れず、目
を覚ましていなさい。』」

ルカ福音書〔オリーブ山の祈り〕
では、もう少し激しい〔壮絶な〕

祈りになります。こう記されます。

「**22:44** イエスは苦しみもだえ、
いよいよ切に祈られた。汗が血の
滴るように地面に落ちた。」「……
22:42 「父よ、御心なら、この杯
をわたしから取りのけてくださ
い。…」

ヨハネ福音書の「大祭司の祈り」
の言葉の背後には、受難を前にし
た「ゲツセマネの祈り」のもつ壮
絶さが隠されています。ヘブライ
人への手紙５章７節は、この激し
い主イエスの祈りの姿勢につい
て、次のように語ります。「**5:7**
**キリストは、肉において生きてお
られたとき、激しい叫び声をあげ、
涙を流しながら、御自分を死から
救う力のある方に、祈りと願いと
をささげ、その畏れ敬う態度のゆ
えに聞き入れられました。**」まる
で祈りの戦いをしている一人の信
仰者を描いたような描写です。

彼は、神と等しい姿を捨てて地



上に下った救い主なのです。天に向かって目を上げて祈るイエスは、地上を歩む旅人であります。**天と地の間の裂け目に立たされているのです。「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」**(マタ6:10 口語訳)という主の祈りの言葉は、地上を歩む者にとって必然的な祈りなのです。主イエスであっても。神を信じて生きる者は、天と地の間で引き裂かれるような思いを経験するものなのです。イエス・キリストも**天と地の間の裂け目におかれているのです。祈りとは、その裂け目を繋ごうとするものなのです。**

そして二つ目に主イエスの祈りでわたしたちが注目すべきことは、祈りが②「時を教えてくれる」



ということです。祈ることによって、今がどんな「時」なのかが分かってくる、ということなのです。今何を為すべき時なのかが分かってくるということなのです。つまり「**祈りによって時に目覚める**」ということです。祈りのなかで、イエス・キリストは決定的な時の到来を自覚します。「大祭司の祈り」の冒頭ヨハネ17章1節です。「**17:1 イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。『父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。』**」

また祈りは、今がどんな時かを理解することによって、状況や時の流れに翻弄されないで生きることが可能にするのです。主イエスはカナの婚礼で、婚宴のぶどう酒がなくなったとつげる母に向かって言います。「**2:4 イエスは母に言われた。『婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません』**」(および7:6-10)。

また祈りは、様々な日常茶飯事も含めた、出来事の背後で働いておられる神さまの時の移り変わ

り、その「神の時」へと思い（魂）をつないでくれるのです。わたしたちの魂は、祈りの中で、日常的な現実の相から、神の永遠の相へと昇っていくのです。そして永遠から今を見る。永遠の相から、今の時を見ることを教えてくれるのです。神の目ですべてを見ることを教えてくれるのです。祈りは、主イエスにとっても今を生きる力の源であり、平安の源だったのです。旧約聖書のコヘレトの言葉は、人間の営み（日常）が実に空しい（虚無）だと語ります。「空の空。伝道者は



Y. 「さよならもあふれぬのさやん」エッセイ・アート・1999

言う。空の空。すべては空。／³日の下でどんなに労苦しても、／それが人に何の益になろう。／…… ¹⁴私は、

日の下で行われるすべてのことを見たが、／なんと、すべてが空しいことよ。／風を追うようなものだ。」

しかしコヘレト（伝道者）は、この現実の空しさを超えていきます。コヘレト（伝道者）は、何の変哲もない日常に、神の時を見いだします。祈りが、時のなりわい

を支配しておられる神の存在を教え、その神への思いが時を超えて永遠につながっていくのです。コヘレトの言葉 3 章 1 – 1 1 節。

「¹天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。／²生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を引き抜くのに時がある。〔日常的な営みです〕／³殺すのに時があり、いやすのに時がある。くずすのに時があり、建てるのに時がある。／⁴泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある。／⁵石を投げるのに時があり、石を集めるのに時がある。抱擁するのに時があり、抱擁をやめるのに時がある。／⁶捜すのに時があり、失うのに時がある。保つのに時があり、投げ捨てるのに時がある。／⁷引き裂くのに時があり、縫い合わせるのに時がある。黙っているのに時があ

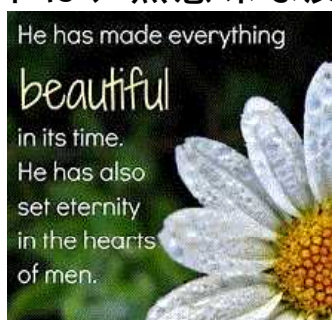


り、話をするのに時がある。／
⁸愛するのに時があり、憎むのに
時がある。戦うのに時があり、和
睦するのに時がある。

〔中 略〕

¹¹神のなさることは、すべて時に
かなって美しい。神はまた、人の
心に永遠への思い〔祈り心〕を与
えられた。しかし、人は、神が行
われるみわざを、初めから終りま
で見きわめることができない〔有
限ですから〕」（新改訳）。

「永遠への思い。」それは、有限
なる人間が、あるいは有限である
からこそ、無限なるもの、永遠な
るものに寄せる思いであり、地上
という時〔時間〕の制約の中でし
か生きることのできない人間の心
が、地上の時の制約を突き破って、
神に向かって昇っていく、祈りな
のです。コヘレトは、無意味な反
復に見えた日
常の茶飯事に
「神の時」を
見たとき、「美
しい」と語り
ます。ある説教者は言います。「春
には花咲き、神の必然が開花しま
す。祈りとは、神の呼吸にあわせ
て、咲く花と同じように呼吸する



ことなのです。その時わたしたち
は、私たちの人生に時と共に咲く
花を見出すのです。」

そして主イエスの祈りは、3つ
目に、③現実世界をしっかりと歩
むことを教えてくれます。自分に
与えられた使命・競争路を走るこ
とを教えてくれます。主イエスは
祈ります。「時が来ました。」神の
子が神の「栄光を現す」時です。
ヨハネ福音書では究極的な「栄光」
とは十字架のこと
です。十字架は屈
辱ではなく——屈
辱を超えた——「栄
光」、救いの完成
の時なのです。十
字架で主イエスの
命が散るとき、それは僕として仕
え、自分の命をも与える良い牧者
としての主イエスの地上の生涯・
命が満開に達した時なのです。神
の時がきたのです。ヘブライ人へ
の手紙の著者は、十字架の苦しみ
と栄光をこのような言葉で語って
います。「12:1 こういうわけで、
わたしたちもまた、このようにお
びただしい証人の群れに囲まれて
いる以上、すべての重荷や絡みつ
く罪をかなぐり捨てて、自分に定



められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、12:2 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。」主イエスにとって、十字架は神のもとに続く競走路の最後に立ちはだかる「心臓破りの坂」なのです。そしてわたしたちにも自分の十字架があります。天と地の間の裂け目の中で生きた主イエスは、神の玉座に向かって、栄光のゴールを走り抜けたのでした。

そして主イエスの祈りは、四つ目に、④永遠の命を現実に生きることについてヒントを与えてくれます。主イエスは、こう語ります。

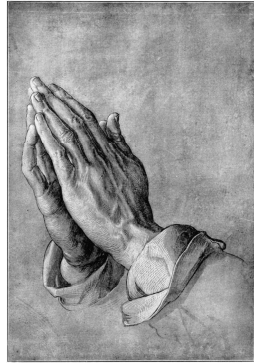


2 節。「17:2 あなた〔神〕は子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。」そして「17:3 永遠の命とは」、先ほど見ましたよう

に、3 節「唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ること」なのです。永遠の命とは、「唯一のまことの神」を知ることと、神が遣わされた「イエス・キリストを知ること」なのです。命が、徹底して関係として捉えられていることが分かります。聖書には2種類の「生命」が出てきます。一つは〈ビオス βίος〉自然的生命、生物学的生命のことです。もう一つは〈ゾーエー ζωή〉人格的生命です（松永希久夫 『イエスの生と死——聖書の語りかけるもの』）。ヨハネ福音書における「生命」とは、人格的生命〈ゾーエー ζωή〉のことです。ですから主イエスは、「11:25…わたしを信じる者は、死んでも生きる。11:26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない…」と仰るのです。生命は、神との関係の中にこそ宿っているのです。

わたしたちは、自分で自分をよく知っていると思っています。しかし、わたしたちは十字架を通してはじめて、自分の罪も神の愛も、自分と神が見えてくるのです。生命の主との関係の中ではじめて、

生命はその根源と繋がるのです。その関係性を回復するために十字架があったのです。神の前にある罪が処断され、十字架の主イエスを仰ぐ者に、罪の赦しが宣言されるのです。



4－5節で今と永遠がつながります。「17:4 わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上でああなたの栄光を現しました。17:5 父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。」今から主イエスに与えられる栄光と、天地創造前の栄光が重なってきます。今が永遠と重なる時、それは祈りが深まる時、永遠への思いが神に向かって拓かれていく時です。現実の時の世界では、時がすべてを支配し、時は過ぎていくと同時に、劣化と腐食と破壊をもたらします。今日買ったお豆腐は1週間も経てば食べられなくなります。美しかった乙女も時間とともに老いさらばえていくのです。永遠は、ある意味で、この時の支配からの自由を意味しま

す。主イエスに神から与えられた「すべての人を支配する権能」とは、時の支配から人を自由にする権能なのです。わたしたちの自由を奪う支配ではないのです。

ドストエフスキの『罪と罰』の解説書(『ドストエフスキの作品』)の中で、小林秀雄はこのようなことを書いています。「『罪と罰』の終末で、作者は、ラスコオリニコフを、苦しい黙想〔祈り〕の裡に、シベリヤの荒野に遺わした。そして、時が歩みを止め、アブラハムの時代は、この最新式の殺人者にとっても過ぎ去ってはみないと注意した。」ドストエフスキ自身が思想犯として、シベリアで4年の刑期を過ごした人です。彼は『罪と罰』の主人公ラスコオリニコフを殺人犯として、同じシベリアに送ります。川岸の丸太の上に座ったラスコオリニコフの眼に、遠くの遊牧民の天幕が小さな点のように止まります。そしてドストエフスキは「そこではまるで、時そのものまでもが歩みを止めて、恰もアブラハムとその



牧群との時代がまだ過ぎ去っていないかのようにあった」と解説を入れます。アブラハムの時代は紀元前19世紀、ドストエフスキーが『罪と罰』を書いている時代は、つまり主人公ラスコオリニコフの時代紀元後19世紀。つごう38世紀の時間が歩みを止めたようだと語るのです。時とは、先ほど言いましたように、過ぎていくと同時に、劣化と腐食と破壊をもたらします。その「時が歩みを止め」というのです。アブラハムの時代に真理であったことは、今もって真理だということです。「時が歩みを止め」ているからです。「時が歩みを止め」ととき、劣化と腐食と破壊は止み、時間に支配されない、無時間的な真理の次元が拓けてくるのです。小林の文章の続きです。「福音書が監獄で開かれた際も、時はやはり消えたであらう。これは単なる比喻ではない。



……時が消える感動だけが過去を未来に本当に結びつける。」福音書が書かれたのは1世紀。しかしドストエフスキーの生きた19世紀との時間の差は問題とならないのです。時が消えているからです。『源氏物語』を読んで感動しました、という人に「宇宙に人間が行く時代に、そんな古いもので満足しているなんて信じられない」などと言ってはならないのです。真の感動は時間を飛び越えるのです。古典作品とはそのような作品なのです。永遠と出会うのです。感動が時間を超えてやって来るのです。時が消える感動だけが、過去を現在にそして未来に結びつけるのです。小林の文章です。「ドストエフスキーが、聖書を見た眼もさういう眼であった事は疑びない様に思はれる。」聖書がドストエフスキーに迫ってきたのです。そこには時間を超えた、永遠との出会いがあったのです。続けて小林の文章はこういいます。「聖書は講壇や祭壇で開かれたのではない。……社会人としての一切の特権を奪



われた彼の眼に見られて、長年の歴史が聖書に附した特権的な意味が悉く脱落し、聖書と言う謎が裸になる様を思う。時が消えたのである。」聖書は講壇や祭壇で開かれたのでは決してありません。不潔な汚れた牢舎の、汚れた囚人服の膝の上で拓かれたのです。そこでは、聖書がヨーロッパを中心とするキリスト教世界で、長年にわたって蓄積してきた一級の知性による研究の歴史も、解釈の歴史も、教会の権威さえ意味をなさないのである。聖書そのものが、社会人としての一切の特権を失った、囚人の心に迫ってきたのです。裸の聖書が迫ってくるのです。時が消えたからです。

現実の時の世界では、時がすべてを支配しています。この支配から逃れる者は誰一人存在しません。しかし主イエスはこう言われるのです。神は御「子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができます。」(2節)。永遠の命とは、時の支配から解放されて、神と共に生きることなのです。だから主イエ

スはこう言われたのです。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」(3節)。

祈りは、時の制約の中に生きるわたしたちと、永遠の神とをつなぐものなのです。祈りがあるからこそ、この制約の中で生きることができるのです。

新しい1週間の歩みのために祈りましょう。

2020.5.3 日本基督教団千歳丘教会礼拝

